

3月3日 ヨハネによる福音書6章60～71節

説教題：「あなたについていけない」

本日は、受難節の中で行われる聖餐式を、どのように受け止めればいいのかについて考えていきたいと思えます。そもそも、一般的に聖餐式はクリスチャンだけが参加できるものなのですが、当たり前に行っているその線引きの根拠はどこにあるのでしょうか。一つには、江刺教会の教会規則にそのように定められていることが理由にあります。ただそれだけではなく、私たちは聖書を根拠にしてそのような線引きを行っているはずです。

今日の6章では、ヨハネ福音書における聖餐の勧めの言葉を受け入れられず、「あなたにはついていけない」と離れていった弟子たちの姿が記されています。彼らにとって聖餐のパンとぶどう酒は、信仰によって得た権利などではなく、「律法で口にするなど言われているものであり、どうしても受け入れたくないモノ」でありました。だからこそ多くの人々がそれを受け入れることができず、今日の個所でイエス様から離れていくこととなりました。

私たちにとっても、実は「聖餐にあずかる権利」などというものは存在しないのかもしれませんが。「クリスチャンになったから聖餐式に参加できる」という特権でも喜ばしいものなどでもなく、そのパンとぶどう酒は苦渋と嫌悪に満ちた、しかしキリスト者としての「義務」でありました。

だからこそ、聖餐式の式文にある「ふさわしくないままでパンと葡萄酒にあずかっているはいけない」という言葉は、クリスチャンであるかどうかという線引きを求めているのではなく、自分たちの罪を悔い改めなければいけないという私たちの行動を問うているわけでもなく、そのパンと葡萄酒を、私たちの「義務」として、イエス様との「約束」として厳粛に受け止め、飲み干す覚悟を求めているのです。そう考えれば、私たちの聖餐式に洗礼を受けていない人が参加できないことも不思議なことではないのです。その一人一人にはまだ義務が課せられていないのであり、しかしその一人一人を神様はいつも招き続けていることを、私たちは覚えておく必要があります。

なんせ、私たちが特別に頑張った結果として聖餐にあずかることができているわけではありません。神様が私たちを選んでくれて、私たちのことを愛してくれて、私たちが救いにあずかれるようにいつも目をかけてくれているからこそ、私たちはその恵みを受け取ることができています。確かなことは、私たちは聖餐式という形式そのものではなく、パンとぶどう酒のおいしさそのものではなく、その向こうにあるイエス様とのつながりにおいて、神様とつながる大いなる恵みにおいて、聖餐における全てを恵みとして受け止めることができているのです。

今私たちは、受難節の、悔い改めの日々を歩んでいます。日々の歩みを振り返りながら、そのたびに神様の方向へ向き直りながら、今日のこの礼拝へと、聖餐式へと歩んできました。そのすべてを思い返ししながら、イエス様との約束を思い返ししながら、私たちに課せられた定めを背負いながら、その重みを実感しながら、この歩みをまた一步共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書6章60～71節

- ・60:ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。そして、言われた。「こういうわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ。」このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きますようか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」すると、イエスは言われた。「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。